

5 総括

(1) 縄文時代の遺構と遺物について

上・下層の遺構や包含層などから出土した縄文土器は20余点の小片で、器形が復元できるものはなかった。そのうち5点が楕円形押型文土器で他は無文土器であった。図示した3点の押型文土器は、ともに小さい楕円文の横位方向の施文で、器壁は1cm前後と厚い。無文土器も厚さ1cm前後で、色調・胎土も押型文土器と変わらない。これら押型文土器は稻荷山式～早水台式相当の縄文時代早期ごろの時期と考えられる。

少量の縄文土器に比し、剥片・碎片を含む石器の数は圧倒的に多量である。土坑など出土遺構が明確なものから表土や排土採取品まで数えると、実に7,780点にのぼる。製品としては、狩猟具としての144点と圧倒的に多く、そのうち縄文時代早期特有の基部の抉りが長方形をなす鍬形鏃が大半である。逆に加工・調理具のスクレイパーや石錐、環状石斧、凹石などは数点に過ぎない。また、石材別内訳では、純黒色の佐賀県腰岳産と思われる黒曜石が5,672点73%と圧倒的で、次にサヌカイト1,703点の22%が続き、安山岩177点、チャート・石英などその他は198点で2%に過ぎない。さらに、指呼の距離にある大分県姫島産灰白色黒曜石は30点と極少である。まだこの時期には姫島産黒曜石への指向は希薄であったということであろう。

また、石器製作の素材となる石核はほとんどなく、剥片よりも碎片の方が圧倒的に多い。石器の製作ではなくその後半段階の作業を行っていたのである。剥片・碎片についてはさらに詳しい検討が必要である。なお、土器と石鏃を遺構面別に出土位置を落としたものが、上層の第35図と下層の第41図である。これによると、ほぼ調査区全域から満遍なく出土しているのが分かる。

一方、遺構としては、住居跡や屋外炉などの生活遺構がなく、土器の量も少ないことから、定住的な居住地とはいえず、生活の場は丘陵下の低台地に求められるのである。他方、生産遺構の落とし穴と思われる深い円・方形土坑が尾根上で11基も発見され、石鏃出土数の多さと併せると、縄文時代早期の中村西峰尾遺跡は、狩猟活動の場所であったといえる。

(2) 須恵器散布遺構について

方形区画内上層で出土した須恵器散布遺構の須恵器は、7世紀末～8世紀初頭の年代が考えられる。しかし、周囲にはその時期の遺構や、横穴式石室等の古墳の痕跡もなく、単独の出土であり、古墳墓前祭祀遺構との意義付けも難しい。一方、丘陵頂部にて発見された時期・性格不明の線刻石との関連も考慮しておかなければならない。

8世紀を前後するこの時期は、古墳文化の終末期で律令国家への移行期でもある。さらに言えば、当農耕地方へ渡来人の進出と仏教文化の流入が始まる時期でもある。この時代の変革期にあって、今回発見した須恵器群は何の痕跡を物語るのであろうか。

(3) 線刻石について

丘陵頂部にて5個の線刻石を発見した。いずれも東斜面里道に沿っての原位置を動いた状態での発見である。この辺に線刻石が動かされた理由があるのかも知れない。残念ながら、これら線刻石は年代比定と性格付けが未決着であるが、問題点を2、3挙げる。

線刻石を大きさから検討すると、石（以下、線刻石を石と略す）1・2の移動困難な大形品、石3・

4の移動可能な中形品、さらには携行可能な石5の小形品の3タイプに分けられる。大形品の石1には2面、石2にあっては3面に線刻があり、とくに、石2には3面の図柄がそれぞれ逆向きに描かれ、統一感がない。いずれにしても、大形品1・2は複数の面に線刻があり、石室内部を飾る装飾古墳の石材としては不向きである。また逆に、小形品の石5も板石で表裏2面に線刻があり、石室では使う場所が限られる。中形品は石室石材に適し、石室中位より上に積まれることになるが、この個所にはあまり線刻は描かれない。

また、今回発見の石1・2同様に、複数の面に線刻した例も知られる。熊本県宇土半島は横穴式石室に船を描いた装飾古墳が多く存在するが、古墳の線刻石を城の石垣に転用したとされる宇土城三の丸出土のNo.3石材には2面に3艘の船が線刻され、「横穴式石室に用いられた石材としては、(中略)一方の船を正位置に置けば、もう一方の船は天地が逆になり、かなり不自然といわざるを得ない」と報告されている⁽¹⁾。

いずれにしても、今回発見の線刻石は古墳石室に使われた可能性は低いと考えられる。ただ、隣町の上毛町（旧新吉富村）照日1号墳では横穴式石室の二次床面に石3～5のような線刻石使用の例が知られている。

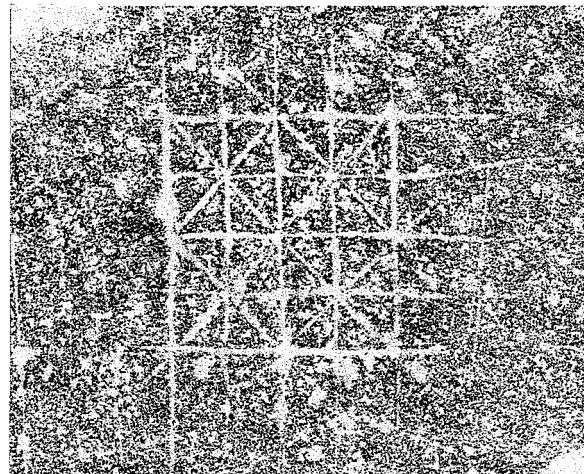
また、線刻図柄でいえば、石1・2の大形品は写実・抽象的に船を描き、石3～5の中小形品は格子文など幾何学文を描いている。少なくとも大形品と中・小型品は使い分けがあったのではなかろうか。さらには、同じ船でも石2A面のように帆印を掲げる新しそうな船もあり、すべてが同時期のものなのかも疑わしく、線刻石の年代比定を一層困難にしている。船図柄については、海運技術史からの検討も必要である⁽²⁾。

次に線刻図柄から検討する。船を描いた装飾古墳は全国各地で知られており、西山由美子氏作成一覧によると80基を数え、そのうち線刻画は50基弱で、九州での中心は長崎県壱岐島と熊本県宇土半島にあるという⁽³⁾。遠くは鳥取県でも11基ほどが知られている。福岡県内での船壁画は不明の1基を除き彩色画13基、線刻画5基で、地元豊前地区では至近距離の黒部6号墳がある。

黒部6号墳は複室の横穴式石室で、玄室左壁に帆柱や櫂を持った密集する5艘の船が、左玄門には大小2艘の船が、右玄門には馴かと思われる線刻画が描かれている。7世紀中葉の時期に比定されている。小田富士雄氏は「前面に広がる豊前海を航行する水運にかかわった被葬者の性格を示すもの」と解釈されている⁽⁴⁾。

当中村西峰尾遺跡が位置する周防灘に面する豊前・豊後には多くの古墳が存在するが、船を描いた線刻画古墳は前述の黒部6号墳と、当遺跡から55km離れた大分県国東半島北端の伊美鬼塚古墳の2例しかないので興味深い。

また、線刻石3・5には格子文が描かれていた。格子文線刻は、大牟田市の倉永茶臼塚古墳群1号墳竪穴式石室の腰石や朝倉市小田茶臼塚古墳の腰石に、地元では前掲照日1号墳、上毛町山田1号墳、穴ヶ葉山1号墳などにもあり、照日古墳では、



第64図 富山市公卿石線刻拓影
(富山市考古資料館紀要より転載)

二次床面使用礫とは別の採取礫にも格子文が描かれていた。さらに、彩色ではあるが、近年発見された宮若市の損ヶ熊古墳は横穴式石室奥壁上半に赤で 4×3 の方眼を描き、縦横斜めの線で方眼の対角線としているという⁽⁵⁾。また最近では、小郡市花立山穴観音古墳横穴式石室の玄室・前門の6ヶ所に格子文・斜格子文線刻画が描かれていたことが追認され、玄室・玄門に集中することから、報告者は、「死者の眠る墓室をこの呪術的図形で取り囲んで侵入者を寄せつけ」ないための「辟邪鎮魂のための敬虔な祈り」と解釈されている⁽⁶⁾。

一方、格子文線刻石は遺跡出土とは限らない。富山県では線刻石3・5そっくりの格子文線刻石が発見され、報告されている⁽⁷⁾。それによると、富山市本宮の立藏神社境内に移築された公卿石と呼ばれる1.86m、幅1.45mの安山岩巨石の半折品で、この石上面いっぱいに6個の格子（升目）や、平行線などが描かれている。

最も明瞭な格子（64図参照）は、「縦5本横5本の太い線による格子を描き、これで区画された4升目毎に、角を対角に結ぶ×印を加える。この線も格子と同様に太い。この 4×4 升目全体の大きさは、12.5cm×12.5cm、升目は1辺3.1cmである」と報告されている。年代については明言されないが、中世以降を想定されているよう、巨石の「靈力を高めるために呪符的なゲーム盤文様を線刻したのではないだろうか」と述べられている。

富山公卿石の実物を見たわけではないが、地域の隔たり・作品の大小・年代不明などの違いはあっても、中村西峰尾遺跡線刻石5と富山例の方眼線刻文様はよく似ている。格子文線刻画解決の手懸りになれば、と思いここに紹介した。

以上、中村西峰尾遺跡出土線刻石は使用状況や目的・年代等について不明な点が多く、今一つ示唆するものがなかった。今後の検討課題も多い。

なお、小形品の石5を除く他の4個の線刻石は、豊前市教育委員会の配慮により豊前市埋蔵文化財センター玄関ホールに展示されている（110ページ写真）。

（4）方形区画遺構について

発掘前の状況と地形測量図からの観察は方形区画遺構の項にて詳しく述べたが、ここでは、以下の3項目に分けて要約し、まとめとしたい。

①地形測量図から分かったこと

- ・方形区画遺構は、丘陵尾根頂部に、北半はコ字状に石垣基壇を築き、南は長さ56mの円周土塁で区切った3段の平坦面で構成される。
- ・平坦面と円周土塁との間には半径25m、幅8m、深さ1.5mの円周空堀がつくられる。
- ・方形区画遺構の規模は、南北長114m、東西幅64mで面積は6,300m²を測る。
- ・平坦面北半の上段面にも半径15～16mの低い円周の段がある。
- ・北の上段面円周コース面の標高は69.75m、南の空堀底標高は71.35mで、その高低差は1.6mと僅かである。東辺中央面は70.75m、西辺中央面は71mと高低差はあまりない。
- ・上段平坦面の東西二辺は100m弱の直線、南北二辺は半径15～16mの円周で、平面は長橿円形の走路状となる
- ・四辺がつくる長橿円形の走路は、テープによる略測では一周222mを測る。
- ・土塁の西半に基部を石で築いた幅1mほどの開口部がある。